

メッセージアウトライン テサロニケ人への手紙 第一 2:1～4 「神を喜ばせようとして」

[1]「兄弟たち。あなたがたが知っているとおりに、私たちがあなたがたのところに行ったことは、むだではありませんでした」

パウロたちの行いは、何よりもテサロニケ教会の人々自身がよく知っていることであった。彼らはパウロたちの働きを現実に見て、聞いて、経験したのである。ここで言われている「むだ」とは神の恵みが実を結ばないことであり、それゆえ、「むだではありませんでした」とは神の恵みが実を結んだということであり、パウロたちがいなくなったら、後には何も残らなかったというものではない。→ I コリント15:10、II コリント6:1

[2]「ご承知のように、私たちはまずピリピで苦しみに会い、はずかしめを受けたのですが、私たちの神によって、激しい苦闘の中でも大胆に神の福音をあなたがたに語りました」

「ピリピでの苦しみ」→使徒16:16以下の占いの霊につかれた若い女奴隷の霊を追いつめたことから始まる迫害。テサロニケの人々はピリピでのこの出来事をパウロたちから聞いて知ったのであろう。さらにテサロニケにおいてもパウロたちは福音のゆえに激しい苦闘をしなければならなかった。→使徒17:1~10 クリスチャンは常に信仰の戦いがある。それに打ち勝っていく原動力は自分の知恵や力ではなく「私たちの神によって」である。クリスチャンはこの神により頼み、力をいただき、強くされ、大胆に福音を語るができるようになる。→使徒4:29~31

[3]「私たちの勧めは、迷いや不純な心から出ているものではなく、だましごとでもありません」

「勧め(パラーシス)」は「宣教」とも訳せることば。パウロたちがテサロニケへ行ったのは観光ではなく、イエス・キリストの福音を宣べ伝えること、宣教であった。彼らの宣教の態度は「迷い」から出たものではなく真実から、真理から出ている。また金儲けや功名心、名誉欲といった「不純な心」から出ているものでもない。そして、悪人や詐欺師たちの行うような「だましごと」でもない。私たちを愛し、私たちの罪の贖いのために命を捨ててくださったイエス・キリストにならっているのである。

[4]「私たちは神に認められて福音をゆだねられた者ですから、それにふさわしく、人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語るのです」

「神に認められて」…神のみことばを宣べ伝える働きにたずさわる者は神に選ばれるのであって自分で自分を推薦する者ではない。→II コリント10:18

パウロもシルワノ(シラス)もテモテもそのように神に選ばれ、認められた人々であった。→使徒9:15、15:22、40、16:1~2

神に認められた者が福音をゆだねられ、ゆだねられた者は忠実でなければならない。

→マタイ 24:45~46、25:21, 23

またそれにふさわしく「人を喜ばせようとしてではなく、私たちの心をお調べになる神を喜ばせようとして語る」ことが大切。

パウロたちは福音の宣教者としてそのように立派に生きた。私たちも同様に同じ神に仕える者として、人にこびへつらったり、この世に迎合する生き方ではなく、衣食住のことも福音を伝えることにも、何をするにも、ただ私たちの心をお調べになる神の喜ばれるような生き方をすることが大切である。→ I コリント 6:19~20